

# 全国保健師長会の

## 被災地支援

―被災地福島県の保健師への支援は、専門性を超えた人と人との絆に―

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 前全国保健師長会会長 大場 エミ

みずからも被災者である保健師が人々を支援する重責と不安感

被災から3か月後、全国保健師長会は東日本大震災の被害を受けた青森・岩手・宮城・福島・茨城・千葉の6県に、その当時会長であった筆者と現会長の加藤会長が代表してお見舞いに伺いました。

6県の各支部長から、震災当日の恐ろしい体験や、その後の保健師活動のご苦労、復興への思いなどのお話しを聞かせていただき、未曾有の大震災のすさまじさにただ聞き入るだけであったことが思

い出されます。また、各支部長をはじめ、被災地の保健師が心身ともに疲労困憊の状態であることも実感しました。

いちばん気がかりであったのは、福島県の原子力発電所の事故により、避難区域でなくても県外避難している方が多いことです。また、双葉町の方々のように避難区域でいつ自宅に帰ることができ

など、将来の福島県に希望がもてない状況にあるということでした。そのような中で、当地の保健師は被災者であるにもかかわらず、これらの人々を支援しなければならぬ重責に押しつぶされそうな不安感を感じていました。被災地での保健師活動が長期化する

部長から、「陸前高田市の社会福祉協議会の相談員たちがたいへん疲れており『支援者を支援する』という

### 阪神淡路大震災で被災した藤山さんが福島保健師に寄り添い支援

全国保健師長会では、平成23年度の「全国保健師長会代議員総会」において、継続的な東日本大震災被災地保健師支援を24年度の活動方針として項目に掲げました。そして、被災地の各支部長と話し合

また、福島県支部からは、「福島県の保健師が非常に疲労困憊して、仕事が手につかず、やる気が起きない、緊張の糸が切れてしまった状態であり、保健師の業務

に掲げていましたが、具体的にどのような支援が必要なのか暗中模索していた中であつたため、福島県支部からの保健師が「いままでのつらさや疲れや不安な気持ちを話し合う」場づくりを支援してほしいとの申し出は、最もふさわしい支援と考え、それに応えることとしました。

支援するにあたっては、全国保健師長会のOB会員である筆者と、前常任理事である神戸市の藤山明美さんの2人で対応させていただくことになりました。

藤山さんは、阪神淡路大震災の際、神戸市の保健師として震災を体験しており、福島県の保健師の心に寄り添った支援を行ううえで適任者と考えられました。

### いまだから話せる自分の気持ち を打ち明けた交流会

残暑がまだ厳しい平成24年9月9日(日)に郡山ビッグアイに福島県の保健師が集まりました。福島市をはじめ、浪江市、南相馬市など市町村の保健師15人、郡山市保健所、県中保健福祉事務所、相双保健福祉事務所など中核市・保健所の保

健師24人、合計39人の参加でした。参加者は全国保健師長会の会員にとどまらず、若手の保健師の参加者も多く、福岡県と埼玉県から長期応援派遣の保健師にも加わっていただきました。午前中に筆者と藤山さんから「震災で傷んだ心、どうすればよいのか」と題してそれぞれ50分の講演を行い、その後、参加者どうしで「いまだから話せる自分の気持ち」をテーマにグループワークを行いました。

### 容易に消すことができない 放射線被曝の恐ろしさや不安

グループワークは5グループで、震災当日の話、原子力発電所の爆発、住民とともに避難した様子、避難者を不眠不休で受け入れた状況、そして、現在も県外避難している母子の状況、残されている父親の状況などについて話し合

グループワークの目的は、参加した保健師が思いの丈を話し、自身が癒やされるのが目的であったので、記録や発表はせず、話したいことだけを話すことにしました。

筆者が参加したグループでは、「大地震が発生し、職場の建物が崩壊するのではないかと恐怖にさいなまれ、落ち着いたと思ったら、今度は原子力発電所が爆発し、情報が錯綜する中で不安だけがつのった」避難区域の町村の住民が避難してきて、放射線の測定検査を不眠不休で行った。そのときのことを考えると、無我夢中で記憶が飛んでいる部分もあった。当時は、正確な情報が入らず、テレビもつかず、そのときの不安な気持ちは計りしれないものがあつた」

いくら、科学者が福島県域の放射線量は安全といっても、今回の原子力発電所の爆発による放射線被曝の恐ろしさや不安は容易に消すことができないことを実感しました。

### これからも続ける 福島県への支援 専門性を超えた人と人との絆

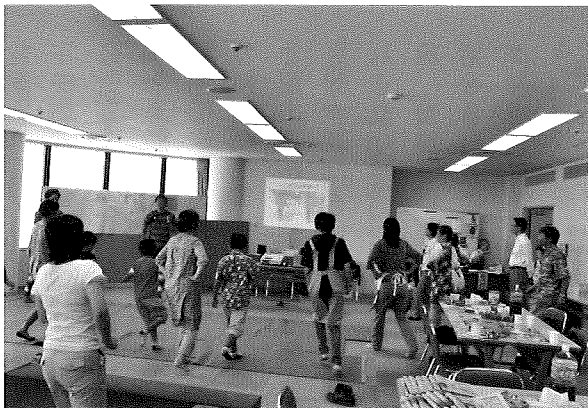
東日本大震災により被災した福島県の復興は長期にわたると思われることから、全国保健師長会としては、今後も継続的な支援をしていきたいと思ひます。今回は平成25年2月23日に「いわき市総合保健福祉センター」で、前回と同様のテーマで「震災で傷んだ心、どうすればよいのか」と題して開催します。

次回も、全国保健師長会OB会員である筆者と藤山さんが参加する予定で、福島県の保健師と交流する中で少しでもお役に立てることを願っています。私たちも福島県の保健師との結びつきが強まることで、さらに保健師としての専門性を超えた支援により、人と人との絆を得られることに喜びを感じています。

前全国保健師長会会長  
大場工ミの講演

「2012年夏休み子どもの城 遊びを通して親子支援」のイベントの紹介

筆者の現職場である「社会福祉法人恩賜財団母子愛育会」の中に、「東日本大震災中央子ども支援センター」の事務局があります。東日本大震災中央子ども支援センターでは、8月20日～24日までの5日間、東京都渋谷区の「子どもの城」で福島県等から首都圏に避



東京都渋谷区子どもの城「2012年夏休み子どもの城 遊びを通して親子支援」(平成24年8月20日～24日)

難してきている親子を対象に「2012年夏休み子どもの城 遊びを通して親子支援」と題したイベントが開催されました。

全国保健師長会はこの「東日本大震災中央子ども支援センター協議会」のメンバーに入っていることから、このイベントに協力することになり、首都圏の保健師5人が5日間健康相談などの対応を行いました。プレイルームでの声かけの中で「居住地の放射線対策や医療情報を知りたい」などの相談がありました。

このイベントは、保健師以外に

も助産師、臨床心理士、社会福祉士など、多くの専門職をはじめ学生などのボランティアの協力で開催され、福島県庁の保健師や事務職も参加しました。

来場者は5日間で125人、福島県85%、岩手県6%、宮城県9%で、そのほとんどが福島県から首都圏に避難している母子でした。父親が1人福島県に残って仕事をしており、週末のみ妻や子に会うため避難先に通うケースが多くみられました。「高速道路が無料のときはよかったです」が有料になってからは経済的に大変だ。夫は福島に帰って来てほしいというが、放射能が心配で戻ることができない。など、どの相談者の内容も家族が離れて生活する苦労や家庭の崩壊につながるのではなど深刻な内容でした。

福島県双葉町が町ごと

移転している埼玉県加須市の  
愛育班活動

また、福島県双葉町が避難している埼玉県の加須市では愛育班活動が活発で、8月5日に騎西生涯学習センター(キャッスルきささい)

で加須市母子愛育連合会による「七夕まつり」が双葉町の親子も参加して開催されました。

双葉町から避難してきた方の中に双葉町に帰ることを断念し、加須市に永住することを決め住宅を購入された方がおられますが、その方は愛育班の会員になり、加須市の愛育班員の方々と交流しながら活動していました。

当日は、加須市の保健師、双葉町の保健師、子育て支援担当職員も参加しイベントを見守り、盛り上げてくれました。双葉町の子育て支援担当職員は「皆さんにありがとうございました」といいます、ということしか言えません」との言葉が印象的でした。

県外避難、別居生活による

家庭崩壊の危機

伺った話の中で、筆者がいちばん危惧するのは、福島県外に避難している母子と福島県に残っている父親の別居生活が続くことによる家庭崩壊の危機です。また、避難している母子も大変であるが、残された父親も精神的に弱っており心身の健康が損なわれている状

況であること、放射能汚染問題が別居して子育てする家族の崩壊を招くおそれがあることへの恐ろしさに憤りを感じていることを、参加している保健師さん方に伝えました。

本来のテーマとは少しかけ離れた内容にはなりましたが、筆者が体験した福島県支援で知り得た状況を伝えることができました。

前全国保健師長会常任理事

藤山明美さんの講演

阪神淡路大震災の

体験談、トラウマ

藤山さんは、阪神淡路大震災発生時、神戸市の保健師の職にあり、当時の悲惨な状況やつらい体験を話されました。仲間の保健師間でも長い間話することができなかつたとのことでした。10年程度経つてようやく初めて話ができるようになった保健師もいたことや、阪神淡路大震災のみずからの体験がトラウマとなって、新潟中越地震の際の支援に参加できなかった保健師もいたことについて



「ハーブの栽培」について説明する藤山さん

話されました(新潟中越地震の際に神戸市では保健師を応援派遣していました)。

このように、大震災で受けた心の傷はいまでも深い心の痛みとなっており、長期にそのつらさを持ち続けるものであるが、それだけ重い体験であること、自分たちも本場の回復には時間がかかること、しかし乗り越えることもできることなどが伝わり、参加していた保健師は藤山さんの講演から多

くの勇氣と癒やしを得ることができました。

藤山さんからのメッセージ

「ハーブで癒やしを」

講演のあと藤山さんは、現在通学している「兵庫県立淡路景観園芸学校」で学んだローズマリーの栽培方法を教えてくださいました。ローズマリーはラテン語で「海のしずく」の意味をもち、さわやかな香りがあり1年中緑を絶や

さないことから多くの人々に愛され、また、肉や魚料理の際にはくさみをとる、もちろん香りづけに利用され、ほかにも酸化防止や消促進作用があり、若返りのハーブとして愛され続けていることなどの説明がありました。参加者一人ひとりが栽培方法を学べるように、土と容器とローズマリーを神戸から持参してくださった藤山さんから、福島県の保健師が1日も早く元気になるようにというメッセージを感じることができました。

藤山さんの栽培方法の説明を聞きながら心が豊かになり、温かい気持ちに包まれたのは私だけではありません。その後、参加した保健師の自宅でもローズマリーが育ち、それを見るたびに藤山さんのことを思い出していることと思います。

大場工ミ(おおば えみ)  
岩手県宮古市出身。昭和49年3月埼玉厚生専門学校保健師・助産師科卒業。昭和49年4月、昭和54年3月東京都港区区立保健所勤務。昭和54年3月、平成24年3月横浜市役所勤務。平成24年3月横浜市南区福祉保健センター長を定年退職。この間、平成19年度、平成23年度まで全国保健師長会会長を務める。現在、社会福祉法人恩賜財団母子愛育会愛育推進部長。